

目的 本研究は、皮膚の色調と有彩色という表題で、昭和43年より55年迄に計測した1,137人の女子大学生の皮膚色調と純色の有彩色5色との関係や、肌色が明るく見える色調暗く見える色調について報告し、更に明度4, 6, 8の青色色紙及び黄色色紙との関係について心理実験を試み、その結果を報告した。今回は明度5, 6, 8の赤色色紙を色研に依頼して作成し、肌色との関係を心理実験で試みた。

方法 1) 実験色票の作成 縦26cm横109cmの明度6の灰色のラツヤ紙に、縦横13cmの明度5, 6, 8の赤色色紙を空間9cmずつあけて貼付し、色紙の中央に3cm四方の肌色色票を貼付した。今回実験に供した肌色色票は2.5YR, 5.0YR, 7.5YR, 10.0YRのゲル-70である。2) 実験の方法 対比現象の心理学実験の視感距離は7mとし、実験の照度450Luxとした。実験に参加した学生は42名である。実験に用いたイメージ用語は8形容詞対とし、7段階評価法で評定を行なった。その評定結果の資料に基づいて分散分析を行ない、F分散比による8形容詞対のイメージの心理的な有意性を分析した。

結果 赤色の明度は、純色よりやや暗い5・6・8としたが、肌色の明度と赤の明度の差との関係は、全体にあまり顕著な差が認められなかった。肌色の明度の関係も形容詞対で見ると、あまり明確な差はみられなかった。赤色の明度の項では1%の有意水準で、ラツクローモダンと地味な一派手なに差がみられ、5%の有意水準であっさりくどいとドレッシー—スポーティの項に有意差が認められた。